デーリー東北新聞社提供

デーリー東北
2024年（令和6年）3月25日（月曜日）（3）

八戸工業大・桶本研究室「音楽と情報技術」

遠隔音楽レッスン 可能性は

最前線
研究室の挑戦

都市部と地方の環境格差、解決へ

八戸工業大の桶本まどか助教(28)の研究室では、情報技術を用いて音楽の遠隔レッスンが可能かどうかを研究している。都市部と地方の間で音楽の指導環境に格差が広がる中、対面と同様の形でレッスンが受けられるための要素を抽出し、多くの人に音楽体験してもらうのが目的だ。

情報技術を使って音楽の分析などを行っている桶本助教。遠隔レッスン環境の構築もその一つだ。研究のきっかけは新型コロナウイルス流行の真っ最中だった2020年ごろ、当時在籍していた国立音楽大（東京）の大学院で、音楽を志す同級生が従来の対面方式でレッスンを受けられなくなったことにある。

学生らは、やむなくウェブ会議システムを使ったオンライン方式に切り替えたものの、生で聞くものと「音が違う」などの声が上がったという。システムごとの音の違いをアンケート調査したところ、それぞれで聞き手の印象が異なることが判明した。

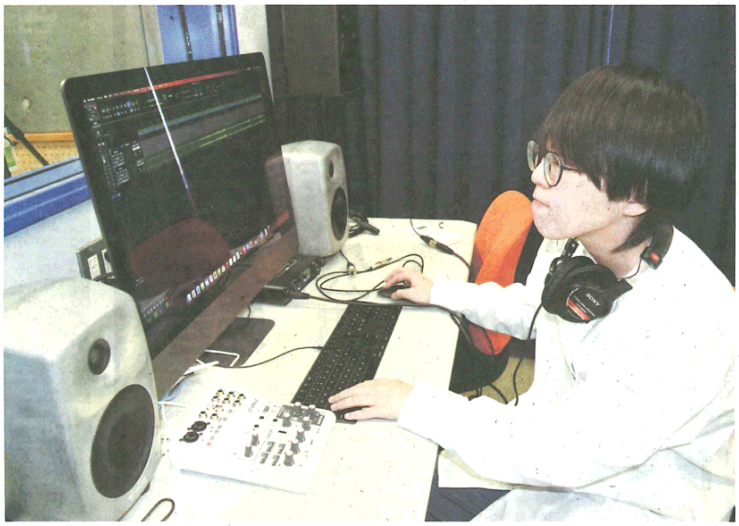
各システムの違いについて、桶本助教は「メーカーごとに高周波カットや音の大きさを平準化している。その差ではないか」と推測。音にこだわる音大生にとっては対面との差が大きい結果となったという。ただ、このことが遠隔レッスンの可能性に興味を持つきっかけとなった。

都市部には音楽大や音楽教室などが多数立地しており、演奏家も多い。対面でレッスンを行うことが求められる業界にとって、地方とは必然的に指導機会などで格差が発生しているのが現状だ。加えて、国内では中学校の休日部活動の地域移行も進んでおり、学校以外で音楽を学べる機会の確保も重要となっている。

「遠隔レッスンを一般化できれば、これらの問題を解決する手段になり得る」と桶本助教。そのために、対面と同様の環境で進められないかを模索している。

本年度は、八戸工業大メディアスタジオに演奏者の打鍵の強さや速度などを記録して再生できる自動演奏ピアノを導入。生の音に近い形で、どのように遠隔地へ届けられるかを調べていく方針だ。

一方で、レッスンを受ける側にとっては音だけでなく、演奏者の弾き方など動きも印象などに大きく影響する可能性があるという。どのような要素がレッスンに必要な項目かを併せて分析調査していく考えだ。桶本助教は「いずれはそれぞれの楽器の演奏法に適した形も見つけていきたい」と力を込める。（藤村大地）



メディアスタジオで音源の状況などを確認する桶本まどか助教
＝18日、八戸市

演奏者の打鍵の強さなどを記録して再生することができる
自動演奏ピアノ

◆八戸工業大メディアスタジオ　授業の一環として、動画編集にアフレコを当てるための部屋として整備。その後に音響関係の研究室が使用することとなった。防音室と前室を備えているのが特徴で、前室には室内の状況をチェックできるようにコンソールを備えている。

※この記事・写真等は、デーリー東北新聞社の承諾を得て転載しています。